

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部1年 竹本 有希

今回のバルセロナ大学スプリングプログラムへの参加を通して、留学への関心が今まで以上に強くなったと感じている。本プログラムに参加した大きな目的の一つは、すでに手続きを進めている交換留学に向けて、海外、特にヨーロッパで大学生活を送ることを実際に体験することで、現地での生活を具体的にイメージできるようにすることであり、交換留学の準備という位置づけでもあった。衣食住の形態、防犯意識、体調管理など、新たに気づいたり知ったりしたことがたくさんあり、参加を決めた際の目的は十分に果たせたと考えている。現地の言葉を少しでも話そうとすることの大切さとともに、いざとなったら英語に頼ること、そして自分の英語力が頼みの綱として機能し得ることを改めて確認できたことで、交換留学の不安を小さくすることができた。さらにもう一つ、自分にとって大きな収穫であったと感じるのは、ジョイントディグリープログラムについて知ることができたことだ。バルセロナ大学で行った共同セミナー発表に加わってくれた学生たちは、修士課程ジョイントディグリープログラムの一部として、半年間バルセロナ大学で学ぶということだった。以前から海外の大学院で修士課程を行うことに興味を持っていたが、このような複数の大学で学ぶ機会を得られる制度があることは知らなかった。プログラム生から直接話を聞いて非常に興味を引かれ、自分の将来の新たな選択肢となった。

そして、本プログラムの授業の中で、カタルーニャ語を集中的に学ぶことができたのは非常に意味のあることだったと感じる。特にバルセロナでは、スペイン語よりもカタルーニャ語を少しでも話すと大変喜ばれ、レストランでも雑貨屋でも店員さんの対応が明るくなるということが、現地に行く前から聞いていたことではあったが、実際本当に多くあった。言語と人々の関係は、周囲のほとんどが日本人でみな日本語を話すという日本の環境で生活しているとなかなか意識することがないため、非常に面白い体験であった。また、プログラムに多く含まれていた様々なツアーは、本プログラムに参加しないと体験できないようなことがたくさんあり、貴重な経験ができたと感じている。街の建築物や飲食店にも長い歴史をもつものがあまたとあり、それをガイドさんの詳しい説明とともに見て回ること、あとから街を観光したときにも多くの気づきがあった。個人的な旅行では入ることができないような、大学や美術館の特別なエリアに入らせてもらえたことは素晴らしい経験であった。